

---

# 全人類専門化計画

～応用情報 レポート～

A15TN043 綿岡晃輝

---



---

## ■興味のある分野に対してどのように魅かれたのか、そしてその分野の未来について。

私は人工知能に興味を持っています。人工知能との出会いを説明する前に、さかのぼること2年半。大学入学当初の私は、大学受験から解放され遊びたい衝動が頭の中をぐるぐるしている同級生たちを横目で見ていました。私は違いました。確かに、受験勉強から解放された状況は同じです。ですが、私の頭の中では「やっと自分のしたい勉強ができる」という気持ちでいっぱいでした。その時私が勉強したいと思っていたことは ぽそこん という名の漠然としたものでした。期待で膨らむその物体で何が作られるのか、そして何を変えられるのか、全く予備知識のない状態でパソコンを買ってもらいました。ほとんど初めて触るパソコンを前に何をすればいいのかわからず、とりあえず中にプリインストールされていたExcelで関数を作って遊んでいたのが記憶によく残っています。

数週間前まで高校生だった私は情報が少な過ぎることに気づきました。どんな技術が熱いのかを知りたくて、私は毎朝の通学電車の中でニュースをチェックすると決めました。これが私の脳を拡張させる大きな一手だったのです。それからというもの、プログラミングの重要性を知り、猛スピードでプログラミングを勉強し、ある程度プログラミングの知識が増えてくるとプログラミング関連の記事が頭に入りやすくなってきました。つまり、現代社会における最前線のコンピュータサイエンスが“目指しているユートピア”を漠然と理解するということに繋がります。目指している場所とは...？

現代におけるコンピュータサイエンスが目指しているユートピアとは全人類が生産活動を全くすることなく、先人たちが開発したシステムで自動的に一生を楽に生き延びるという世界です。少し話が大きくなりましたが、要するに自動化をしてもっと楽になろうという話です。これはコンピュータサイエンスの一貫した考えで、小さいところからそれは起こっています。電卓やExcel、ATMや自動改札機、も全てその考え方の結果です。ユートピアまではまだまだ遠く果てしない道のりですが、着実に近づいています。

そこで私は考えました。私がこの先生きていく数十年間で、どこまで進むのかを考えました。解はこうです。人間が判断を行う前に誰もが一度、バーチャルアシスタントに相談する世界です。世界はカオスで先読みが難しく、計算量が膨大です。そこで計算が得意で大容量の情報を持つバーチャルアシスタントが常に人間の執事のように一人一人に付き、相談、助言、そして啓蒙をしてくれる。そこで得られる情報は社会の最先端の情報で、まるで様々な分野の専門家が常に自分のために耳元でアドバイスをくれる。そんな時代になるのではないかと考えました。だから私は今、人工知能の勉強に没頭しています。

これら全ては電車の中でニュースを読んでいる時に思考を馳せた結果です。その大事な習慣は入学時から今まで、1日たりとも欠かした日はありません。